

「無くすこと」は「減らすこと」

そのだ ひさこ

年明け、ある中学校の人権学習の一コマの「質問集会」に呼んでいただいた。私の絵本『いのちの花』を取り上げていて、学習が行った後に「作者に聞いてみよう！」というコーナーがあった。その中で次のような質問が出された。①『いのちの花』という題名はなぜつけたのか。②五人が殺された場面で「俺たちや、人間の腹から生まれた…」の最後の言葉はなぜ消して点々にしたのか。③なぜ、絵本を出そうと思ったのか。④「差別」はどうしたらなくなるのかなど。ちなみに、絵本『いのちの花』は、福岡市内のある「むら(被差別部落)」の史実と伝承をもとに私(そのだ)が詩を書き、「原爆の図」の丸木俊さんが絵を描いてくださったものである。

久々に中学生に会って、少しドキドキ。たくさん目のまっすぐ見つめられ、中学生の姿は初々しく活き活きとまぶしかった。

「いのちの花」という題名は、無

実で殺された五人の墓地でひらめいた。実はこのお墓は3回も建てられた。1800年に五人が殺され、129年後(1929年)にやっと墓が建ち、175周年(1974年)に2回目、2016年には「むら」の人々によって立派な3回目の石碑が建立された。私は現地学習に来られる方々を数百回は案内しているが、今、生きている人々の「いのち」と亡くなった方々の「いのち」とが数百年の時を経てつながっており、大切にされていることを感じ続けてきた。文中で、点々にして消した文字は「人間ぞ」の3文字。この絵本で一番大切な言葉を消すことで、それぞれが自分で自由に言葉を考えてほしいからだ。人権教育は答えの押しつけではない、自由なのだから。

私が絵本を出そうと思った理由は、一つは、「命」や「差別」などの言葉が子どもたちの心にストン！と落ちない現状があり、教材を自分で作ろうと思ったから。もう一

つは「むら」の厳しい差別の中で、人間として温かく誇らしく生きていく人々に出会い、自分の心の貧しさが恥ずかしく…その出会いが私に絵本をかきたい思いを湧かせてくれたからだ。

差別をなくす方法についての質問には、何かコツン！と答えが出てくるまで、生徒とのやり取りをねばった。「この社会に生きていくことは文化だけではなく、偏見や差別の渦中を生きること、刷りこみや偏見のない人などいない。だとすれば、差別を無くすということはどうすることかな?」「ごみは掃除機でなくなるけど、差別はどこにあるかな?」など私からの問いの連発。「究極の差別は心の内に!では差別を無くすことは?」生徒からは「減らすこと!」気づいた子から大きな声で見事な答えだった。それは誰にでもできることである。

●TUNAGU IIとは 人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えるために、そのだ ひさこ先生(福岡県人権研究所副理事)に執筆していただき、偶数月1日号に掲載しています。タイトルの「TUNAGU」には、人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐなど、「共生」と「人権」の時代の到来を願う歴代の執筆者の思いが込められています。

●問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当